浪華俠夫傳

五

へ遠13
966
5

本清
門遠18
號966
巻5

ありつる法といふまぎれ無い外辺乃女よりまつ〳〵と神さま仏さまと叫びて
思へども捨てるるれば大坂さして帰りける

大和の秋谷河内の兵助城講の話

大和のうとうこう峠の禁ふ位む浪人あり名を秋谷伊兵衛
いふ元来強悪の生涯ふく剛人といふハ己が手下
の盗賊ども日外大松屋の店ふく清十帝城街うし侍といふて此ども
ふくあるち新妻い夫よ場う去強盗ふく夜毎よりこのう峠へ出て人形
首ふ焔ぜうと入硫黄ふ火を付ける火とうを甚嘆ろう白き帷子ふ成
て人形えりけて人形の首へ火をとうつせば焔硝へ火をうつり誠ふ焔
硝吹出しぬく見せうけ人とおどし気とうすへ前と懐中のあと取

けるふ茂之清ふ生今く思ひの外なる同ふ逢るゞ即智と出し河内
の兵助ゞ女房おうしゝ偽りうゝ行く金子と貰ひ仕合うしゝ服ゝあ
るうゝ夫伊兵清ハ取ゝゝゝ見めよ死娘とかどうゝ新町或曽根
崎新地へ賣渡しゝ多くの金銀と取ける夫ゆへ折ふし大坂へ出け無慙
なるまべ兵助ゝ宅へ立寄火あゝ驚ひ公易く去るゞ或日兵助ゞ方へ
立寄ゝ新ふ棒鞭の刀如掛く人ふ應對をる様なれゝ夜谷ハ表
裏の火城うう去みゞゝ傍ふ聞かうゝゝる力拾ふ人の曰兵助どの
おい実体ある人なるまべ此牛王吉光の刀狂傾ゝ伝る明日金子五十両持ふ
ゝる人あゝべ此刀と渡し金子請取至るべしと教ゝ去ゝ其人の帰て
ける夜谷ハたゝあく礼と云ゝ兵助ゝ宅へ出るゞ心よ計ゝ
生しゝ大坂へ行ゝゞ変ゝ引うゝ我家へ立帰ゝう手下の者ゝゝる小僧

捜ゝ其身ハさあゝ如様ゝ大坂へ出行ゝる兵助ハ如ゝる事ゝハ去ゝ
べ右の刀と一つあるまべ入大切ふ後所お為し女房諸ゝる伝ゝる
夜半の頃表の戸踏ゞ盗賊三人入来て兵助夫婦と引ゝ縛りの棒
鞭の刀と奪ひ取何国ゝゝも去ゝ逃行ゝる者無態ゝる明ゝ近所
来て大ゝ驚き兵助夫婦ゞ縛ゝ解ゝ様ゝ問ゝ盗ゝ賊ゝ行ゝ方ゝ
去ゝ刀狂変ゝ人ゝいひ入れゝも盗ゝ賊ゝ行ゝ方ゝ知ゝれ此人ゝ大
ふおと後ゝ早速賣ゝ人ゝも兵助ゞ俳ひ来ゝ色ゝ吟味ゝゝる所ふ右の根ゝ
と遊聽ゝうゝも吸ゝ一ゝ色ゝゝ賣主義知せゞ是ハ全ゝ兵助ゞ拵ゝ
ゝ人ゝ数ひゝゝ繰合へ逃ゝ去れべ繰合も市彩ひあゝゝ兵助と
軍仰せ付ゝれゝ西へ女房ゞ逃ゝ大ゝ驚ゝ夫ゝ盗ゝ賊ゝ事ハ天道
ゝゝよゝゝ思ゝ給ふゝん何ゝゝ夫の繼美と助ゝれゝ移し

こゝをあらまとなる兼て謀りし扨谷伊兵衛は何気なき顔して大坂へ
帰り又く云助の方へ立寄られて女房きく人殺と悲しこゝろ
あれど何事も言ふ甚夜盗紙よ奪ひ取られ夫は上のうさびしうて入牢いたせしとなり
これ程の扨谷は仕事なり故を流し枕く不義なる事なり
首人の入牢何とて命のあるべきや何とぞ一日も早く出牢あるべき
ふかうまとなりと実意の申うふ出しくれて女房もう苦
そ仕法切よ絶せられは姉しへ力をゆるしていぐして夫の入牢
と出しとさんや女の力えるくはるくらしくるくいとされを
先方も五十両よ責れ乃なれど五十両の金をはくあひ六人ら日
あくも出牢あるべし女房なども涙を流しいとく実者よりし

以我くいらで五十両の却覚なつ伊兵衛いろくされども
えの実重五年勤なるいとされるべ五十両は出来アアさるべ助及
出牢有べしあり首人の事あれど常不自由なるん我も大和あく扨
谷伊兵衛と申人をありうえ浪人なれば五年の名は男づくあくそ
助及ひて養ひやべし余り甚えの志のいたしくはアあり五
年七月日は愛の間なれど御心を定給へと誠しやあいひられど
女心のあさ申しと誠と思ひ我身勤奉公いたしは厳ひ不アしん
目えの久人夫それのと案ずやありそしあのれえせつあく喜ひ
給へ給へりくは夫も按摩阿波世よいとまあべし其事とさん変
引結べ祈りく勤奉公いたし下さとみくくいひられを扨谷も涙
と流し貞女なるく我も首を武士なりいぐく虚言のあべく四上

八大坂へ取て帰し我ちぐのうへ糸を早速手屠して一日も早く
兵助と出牢させてくれ真よ大坂へ立帰り小の新地よりとやかく
うるさきを恐れ来て右の事ども伝聞十年の年季まで百両
かんとりくだされど高値なりと見へ御相談申べしとちぐべ駕とも
させ其元御出あるべしちぐ年季金子の処へ本人ふ聞せてハ悪し
御了簡あるべしと言合せ駕親方諸ともに兵助ちぐ来り女房よ
引合せ事よ在所よ稼ぎ器量あれば大よ収び扶谷とちぐよ招
き早速金子五十両ツヽ二包渡しくれば五十両
女房ハ渡し一日も早く夫と助のくらいひきたべ女房ハ嬉しく扶
谷同道ちぐ庄官へ右の金子を持参し此方の陰ち世話ち
五十両ハ受ちぐ我身ハ暫日ち奉公ちぐ兵助ハ此御方へ

引ち世話下さるうしと涙かぐ御礼を庄官も女房扶谷ハ深切と感
金子ハ文ち速縁合へ出ち命ち命ひ名れハ女房も安堵しち家へ帰り
扶谷ハ兵助ちの事を駕ふ新兵大坂さして急ぎ出ち
庄官ち縁合へ出ち貴主人金子渡しやべ間兵助出牢の事と聞ある
と驚へられば縁合も亡目人の八牢ふ伺ふ名ち貴色を石垣ち名れ合ちと渡
ち色着尾神兵助と出牢ち分ち名れで庄官ち助女房の深切ち合ふ
ど御ひし扶谷伊兵衛とひふちえと引ち世話して多ちち名ちち
佐ちち色ち兵助大よ驚女房ち貞名扶谷ハ深切ち感謝家のち庄官
よ牧屋扶谷よち城下ち大和の国へ移ち名る
扶谷伊兵衛盲人兵助武敵ち話

伊云蔵ハ兵助が女房とゝ云びうり五十両懐中さく弥助りゝと引
我家へぬすとゝ有るがつくゝゝと思ふようの者ハ連帰りさく伺うせん
途中さく殺さんと思へとも庄官我ハ云助と引後しゐれどゝて
殺さで去よ我身よせんぎゝらん一先連帰りさく詰ゝ問ゝ
度ゝゝ大和へ帰りつゝ先兵助を門ゝ待せ問へ尋くゝ女房下の者
ふゝうくの事と云ゝ世間紋義向いとゝるべしと云合さて兵助
深体ひ入れど女房ゝ下の者ゝも云合のぶとく大ひよいく
ゝゝゝゝ兵助も初く安堵ゝ板谷ハ男衆のものなり
と聞ひゝるかくて各深切よ一日斗ゝ中ゝ有れ九数ごゝ
扨もあさましゝ兵助ゝひるハ郡家の事庄官よりのゝ
ねれば定て諸道具ともゝ扨ひゝ五年のあいだ伺

御世話よ人へねものゝ少しあるとも銀ふいゝ御恩報じ差
上たしとゝひれを板谷能時郡迄ゝ威程男ばくゝ出ゝ
此方ゝ一銭もいく稼ゝも甚ゝ不自由あるべしゝ
拂ひゝ銀ゝゝゝゝ云助ゝ河内をさしてた
ゝゝ御ゝ我村よ来ゝ庄官方ゝ諸或賣拂銀六拾目文取扱
板谷家門深切ゝ風雅ゝ日も七つ過の頃よ帰ゝ人
しゝ家宦ハ今雪是ゝ帰ゝ翌帰ゝ盗ゝ百人登
夜ゝ合ゝ寄る帰ゝ寄ゝ云助ハいやく頃ハゝ峠
盗賊出て人を剥ゝ風変あるべひゝ止者あれと再三ゝ
運の尽ゝやゝ杖を力ゝ山道さして出て板谷ハ今雪ゝ
養介拂ゝ時郡ゝゝ山のまぶくゝ行ゝ云助

夫ども打ちびく小哥をどうとひて来りしと扨谷八雷うり待受るこの
ともいとびをれさあれば大ふ驚何者あれば狼藉をうけ
とも人里遠き山路あれば外答ふるものもなし扨谷朝笑
ひ我を誰とう思ふ扨谷伊之清なり所詮敵して仕事ふ汝あれば何事
を物語く聞さん先日刀を賣よ来りし城余流ぐの聞手下の者よ
言付盗まを其方が女房と百両よ賣世話代五十両ろう其代りよ
汝と我つくれども一ケ月斗養ひられを箕用八海ぐう氏上盲人と養
ハんも面倒なれを冥途へ参れし念佛やせと語りきれば之助大
ふ驚さ扱ハ其方が仕業ふくあるるや夫ともあれ只今迄深切
ある人と思ひし残念さよ思へべく重々の恨なる假令つぐくふ敵う
とも一念ハ此よよ止つく眼紙情さんと函沈うを怒うれば扨谷ハ

扨笑ひ其方如さのもの何確人眼ろして偽後の事あるんと偽ふ
あうるる石ふくく之助ろ天窓を打割るるべ血と流て紅ひとふし若
痛絶ぐるれさ変あれを早く此世の眼取るんと又石をふうるるべ不思
義や盲人の云助両眼をぐうとえ生し世し此眼とるるんと
めくく敵色恐しさにしも不敵の扨谷も懐くおうして手足疲うく汗
ふるとくも心迷うう惑し再ひ石と振と絶ふ之助を打殺し懐中の銀を
取出しうくくの池へ流笑ふくんとをべ之助ろ死殿ろ一つの憂火
あうれ大坂のうくへ逃ろうて冷しき扨谷ハ悪しるぐう之帰ハ
女房ハ涙ぐくの姿ふく人をたどし金とうるる耶へ来るるきくを
も切殺し二人打連我宿へ帰るるがれも之助と殺せし事を包まん
と翌日自河内の庄官ふくく来て云助吹日其元へ金子の請取るもの

されあるとく出ぬ屋敷に帰ぬ盲人のまらぬ紙ひ出ぬ
遠ゑ来ぬ誠ぬ申よいひられば座官も不審ぬ新ぬ流加流
ぬ昨日も玄助其元銀は夫婦のは貧窮ぬ堪ぬ
ゑ御出下さぬ後は涙切のぬ玄助は外ぬ出ぬ帰ぬ
夫ぬ驚き村の者も杉谷諸ぬ
ぬ他の中ゑ助ぬ死髪流ぬ大ぬ驚き早速村方へ死の
と杉谷ぬ来ぬ杉谷座官ぬ来ぬ盲人一人を
何て夜中ゑ出ぬ我は玄助の内義ゑ男つくて妻
ぬ盲人は此人ゑ大ぬ銀ぬ座官も
成ぬ玄助我もぬ夜道ぬ盲人ゑ
ぬて出ぬ玄助其元ゑ一言の返答も出来ぬ玄助殺

されし事其元様へ村方へ毛頭無り合ゑ疑を無しとの一札
差出ぬ是ぬて杉谷ぬと村方連印の書付を
帰へぬ杉谷ぬ玄助ぬ怨ぬ

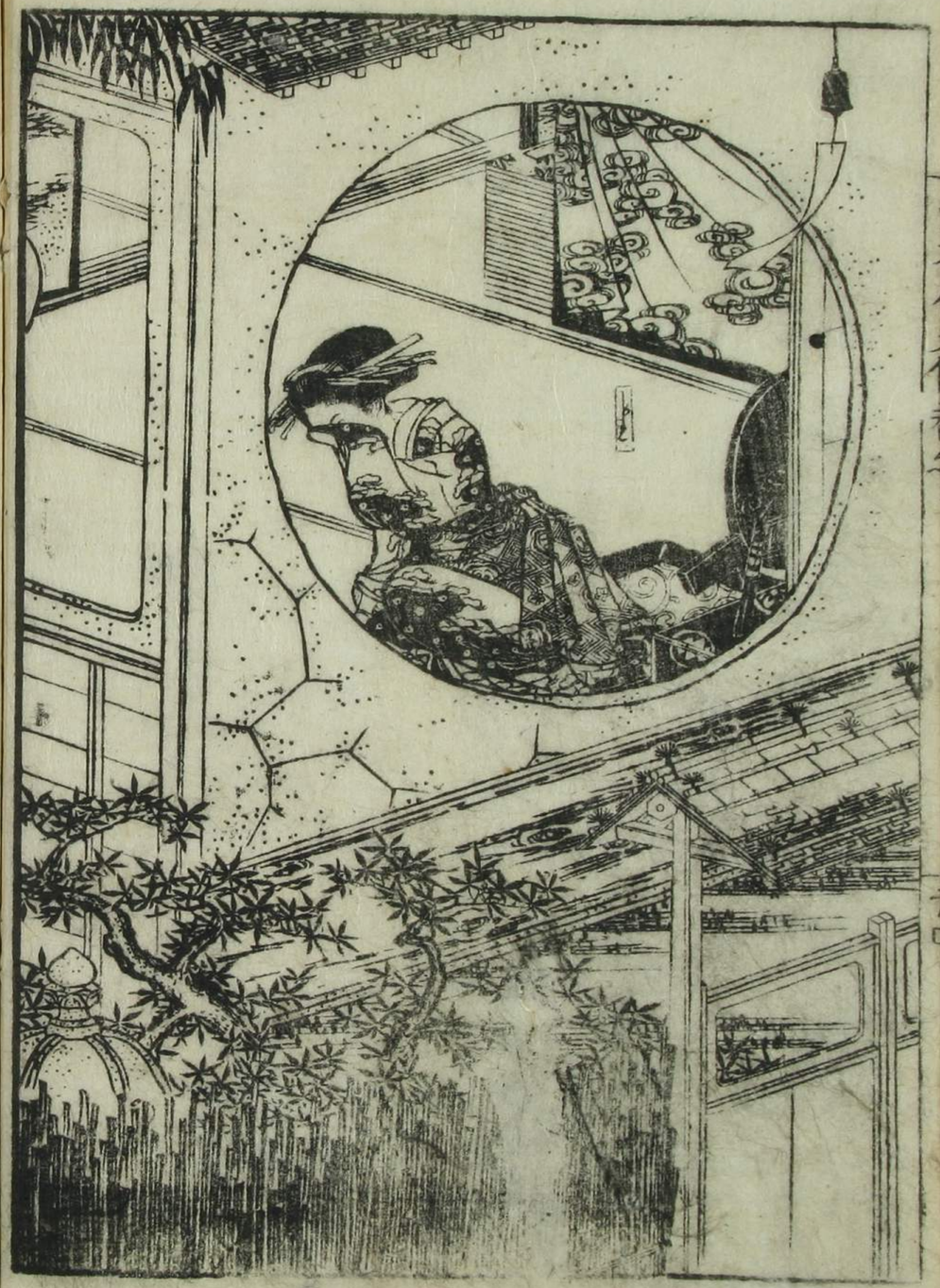
兵助女房契情と亡霊妻ゑ身の上咎語る話

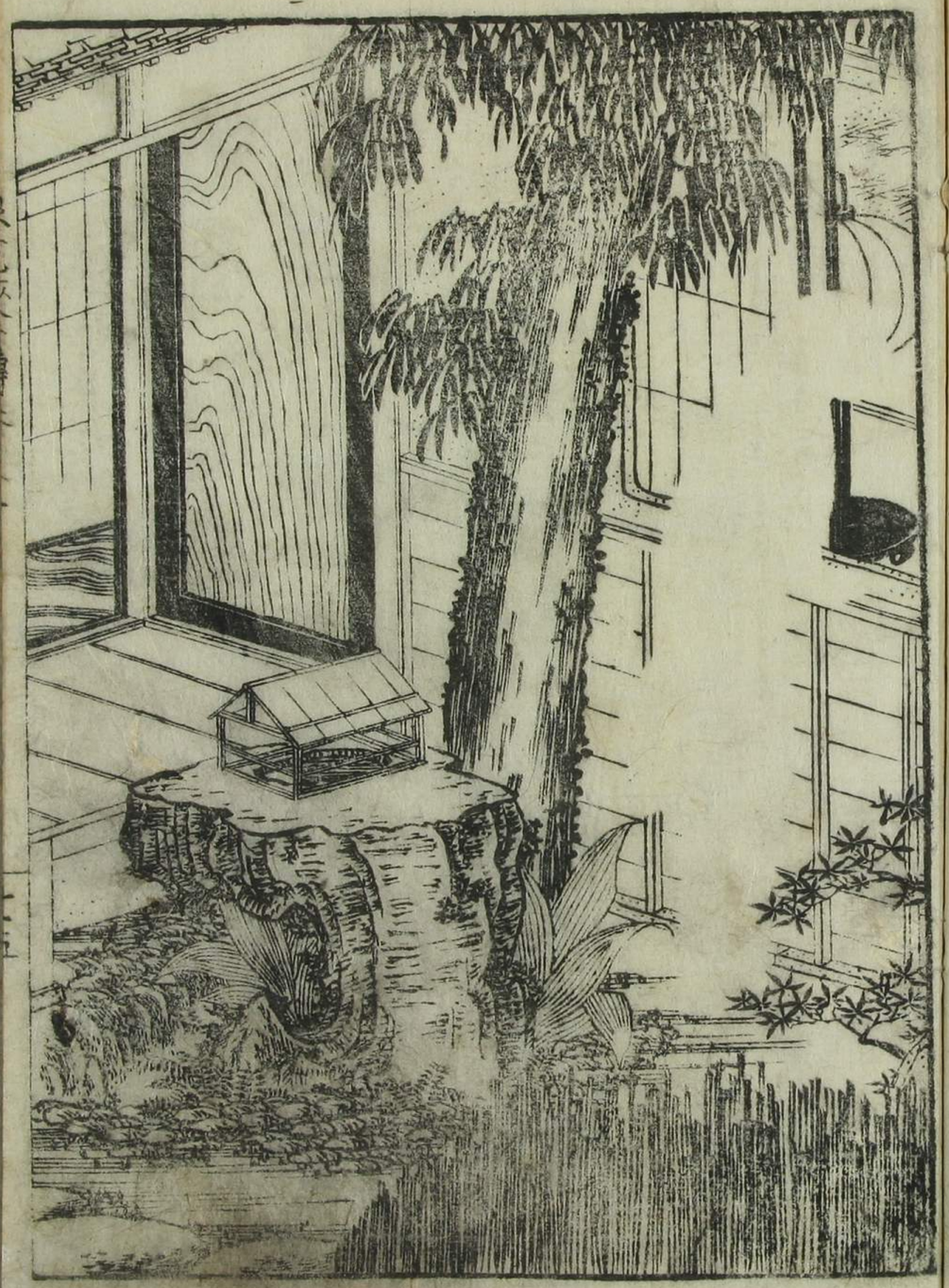
玄助ぬ女房は夫の為ゑ曽根崎新地へ賣渡され名を
ぬ改め動き玄ぬ明石盲人の夫ぬ事のを
思ひ仮ぬ出ぬ事ぬ或夜
ぬ独灯火のを紙方ぬ思ひつけ
ぬて灯火消ぬ又明ぬ
事数度ぬ

くるま
ろくげ
大師の
ちぎり
図

無助懲身い血よまれ出おと泣くし姿よてうしくが傷よ出し居さう
ゆくちひよ驚さ我夫ふは〜まひやと立寄び如何と激失さう不思
義と思へはすこ傷ふあう扨い意しくと思よ我まよひ公ゆんと心内
ちつむとび公助濃どとうくくと流しゆつしや女房我い出世よなくさも
のあう其訳とも語う我恨とも時に世うさん為よ再ひ出土よ素ゆと
なう我い松谷伴兵衛が奸計よ落入手下の者よ力と盗ものうせ
其方以百両よ賣渡し又十あかを先そう其上我と名うく擲殺し
返へくく庄宜ふ一札取深切ようんせ〜ゆ扨更恨とこの海さすくあるれ
かよ然る人とくくい松谷と計く恨どちしゆれうしといふうや
思へい形ち消くく只灯火斗ちくくう孤くく夫の死と
あう其上力と思ひし松谷う敵くなう事・分中のくあるうちあ

ど折伏く強さけるがつくくと思ひ自用の夫のた死ようる
川仲ふ対と泣め其うく夫いあくなくるゆひ何このしきよいさ
みうくん自害ちく夫の仇せんと学ん悟せしがいやく深さ恨と
のこのれどこ出姿とあくいし我茂頼とのふ夫の公れしちくまこい
たらしされど是ぞくいふ證拠もあく孫いのち申全義立して仕換
せんハ必定なれどいくもしして実なう人と我を怪孤光拠と見出し
敵茂討ちやしと公と慈めさあくぬていうく勇ちうしくが心もしちう
られく不便なう妻よ和歌茂藤根津四郎ちうハ久くと知く
用く系詰ちるが歌つふ君根濤新地へ立寄酒きぶべりう一郎
右ういひ歌ハ稽遅よよ女郎を呼く酒の相手よるさびやいく
茂藤も用しんのれば両人二人の女郎と呼びうよ一人の妓婦





蔭之滿が良つく〳〵と詠めける蔭之滿も不審して些ましハどう
中〳〵さう中うかならと云あんがりおぼどろの妓婦もいりさ女おまへな
みの人ハ此を何の中うくしと思案の末ハ蔭之滿漸く云ひ出し其元ろうがり
峠の下ハ河原の人なうバ也やとらふ妓婦まふ躊躇る態かゞざ
は去りければ其ゆゑ盲人の夫あるをいはしてかうな勤ある八ひどく
見りけれバ女房ハ瀬をふりし体かふ語り恥しきがゆへの哀ふよつき
お二人ともまだう男と見えまれハ此称を申たき事あれども酒の真
も覚えんあれバ後ふどもくく此趣申さんまづ酒吸み給へと
いひけれどあふ今も奥ふ入て兄弟きるう相方らしくと定りけれハ
蔭之滿も妓婦が携へて一間ふ入よるり兄弟きるも床よへ入れ
ど先ホどし蔭之滿が問何とや中さんくとよかりけれバ席も中ばならしくふ

にくるハ先刻の咄まくハ正しく人の内室や兼ていろいろなる訳ありて勤め
せるくや不審さよくと見ゆれバ良く涙を拂ひされバ先刻より此両人の中に
此人とハ夜伽の様バ此方より身の上語あらし此称ひ申さんと存しよは名お
給ハ事の嬉しさよはつきのとて此夜のめぐりてくるう峠の林廉よ遁れなる人
らし我せし云助とて盲人の女房まく侍る身の訳よく夫云助
入牢いたし其金銭つくるい申さんため牧谷伊兵衛といふ人の世話まで
此里へ身を沈めたひしよ其牧谷五年の年とうつらひて十年よ定めん
百両よ賣五十両ハ己もらうまう其うへ夫を殺しくようし此頃夢ともなく
夫の姿あらハれ我よあう也侍るされど此事実なるや我ハ勤の身なれバ
國よかへり詮義もならば何卒實ある此方よ逢まうらせなバ之をたてまつり夫の
生死とを糺し孫ひらうの死よ極らバ敵ハ牧谷なるべしあハれ君ども寛へ

は方と見へ又ハ何卒河内へ立越なひ公全義をなし給りれとつまびらかに
物語られバ冨吾右衛門も憬矣と嘆息し暫しが貞心を感じ夕附事に極ると
聞さて彼无瀬立出我とも先わとようの中に疑りしく立安心なる小投さあれハ
近きある物語りと此の摘多夫何おや来経るまあり日の那を枚谷伊丟湧ともふ其
君がすなわて荻中よそろり峠を通りしまうくくの浪矣に逢ひ其ハ者だ
捕へ投子とられハ我ハ兵助と云盲人の女房之丈の人数代なつまりハかゝうの
おまけ者業をなさんとある夜寒と云ひ金子一歩楽し彼が不思べ兵助の内ふ体ひ子細を
よかれハ夕方女房にはやく投ハ誘られせと勧く仕付しが深切なく彼足之杖を衍高かる
悪業の具あれハ此近矣もを家業とし泥棒なくふ一大事を教ね一三引出も世あし明日ハ彼地へ
浅臥て丈の歎を持し居んと云んべしとハ執念深くされども夜ハ枕を隔て伏よ夕数

浪花俠夫傳巻之三畢